

アルゼンチンのスペイン語に関する覚書

—— 1

大 林 文 彦

私が初めてラテン・アメリカを訪れたのは、1958年のことで、メキシコからチリーまでの太平洋岸の中南米諸国であった。当時は日本国内ではスペイン人と日常的に接触したり、教材のスペイン語テープを豊富に活用することはほぼ不可能であった。しかし、ラテン・アメリカのスペイン語が、発声・語彙・語法等すべてにわたって、スペイン本国のいわゆる標準スペイン語と比較してかなり異なる面をもつことは知っていた。

実際にラテン・アメリカの人々と会話を交わした時、たんなる知識と実地での体験の力との差異を学んだ気がする。もっとも強い印象を与えられたのは、チリーの人々のイントネーションであった。歌い上げるような、じつに美しく聞えたこの独特なイントネーションから、メキシコ以南ペルーまでの諸地域相互間でのイントネーションや語法の相違総体よりも、もっと強烈な印象をうけたのであった。

それから連続してこれらの地域を訪れ、日常会話のレベルでならさして不自由を感じていなかったが、1960年にカリブ諸国を訪れた時、キューバのハバナでは猛烈に早口のスペイン語が話されることを知った。ハバナに到着当日は、ごく簡単なこと以外は、ほとんど何もとてよほど、相手のことばが理解できなかったのである。革命成立後まもない高揚した気分とか、まだ雑然とした諸状況とかとまったく無関係に、とにかく理解できなかった。チリーでの新鮮な印象に対し、キューバでの体験も忘れがたい衝撃であった。

その後の体験も重なって、私の心にはラテン・アメリカの広大さと多様性ということが深く刻み付けられているのだが、この印象は、耳で聞いた、生きた庶民の話し言葉から始まったと思っている。

現代スペイン語、カスティーリャ地方の標準的なモデルとされ、全スペイン語圏で共通の通用語であり、また絶えず生成しているこの言語は、ス

ペイン語圏内部の諸地方、諸語域よりの新鮮な寄与を吸収しながら、より豊かなものとなっている。旧植民地世界であるラテン・アメリカからの寄与の力が、今世紀に入ってからはいよいよ大きくなっており、とくに第二次世界大戦以後、文学を通じての寄与が大きいように感じられる。書き言葉は、生きた口語から作家が選んで組み立てるものであり、しばしばその際に作家の美意識や理想志向が影響を及ぼして、生きた口語とかけ離れた人工的な言語による構成物となることもある。しかし、作家が選んだことばによって表明される意識・感覚・思想などが、そのことばによって人々に受け入れられ、ひいては口語にも影響を及ぼして行く。むろん、この過程を即物的な時間で測定することは不可能であろうし、ある生きた口語が変化して行く際には、他のさまざまな要因が働いていることも自明のことであろう。しかし、文学作品の口語表現に与える影響もけして無視できるものではない。ある言語が変化して行く上での、文学作品と口語表現との間に見られる相互影響というものは、かなりの重さをもっているに違いないと思われる。

私のように日本でラテン・アメリカのことを研究している者は、日常的にラテン・アメリカの口語表現に接することが、なかなか難しい。以前と比べ、テープ類（現地で収録したもの）やビデオ・映画なども飛躍的に利用可能であるし、実際に現地を訪れることも経済が許せばずっと楽になっている。しかし、日常的にはやはり書き言葉（文学作品・研究書・論文・新聞・雑誌等）によって研究に当ることが中心となっている。地理的に見ても広大なラテン・アメリカ（ブラジル一国の面積でも日本の二十三倍）の全言語でなく、スペイン語圏全域の全語彙をほぼ収録した辞書が、当然のことかもしれないが、まだ存在していないので、この書き言葉による研究もかなり時間がかかることが多い。スペイン人征服者や植民者の言語習慣が、語彙・語法・発声法とともに、遠い孤立した村落に変化しながら保たれていたり、そこに土着言語の影響が与えられたり、土着の語彙が取り入れられたり、時代的、社会的影響、その他さまざまな影響を受けているのが、ラテン・アメリカのスペイン語と総称されているものであるから。複数の辞書（スペイン、ラテン・アメリカのもの）や各国別特有の語彙・語法を収録した辞書を頼りに、ある表現の解明に取り組むのはけっこう時間がかかり、またすべての辞書類を参照し、ラテン・アメリカの人に質問

しても解明できないことも稀ではない。しかし、このようなことは、すべての外国文学研究者にとっての宿命のようなものであろうし、そのような宿命を喜んで担うべきなのであろう。

ところで、ラテン・アメリカのスペイン語圏の文学作品を読む上で、私はメキシコから中米、カリブ海諸国、コロンビア以南ペルー、ボリビアまでのものと、主としてアルゼンチンとウルグワイを中心とするラ・プラタ地域のもの、はっきり二つに大別できるように感じる。例えばメキシコの現代作家の作品ならば、ナウワトル語系の動植物名や地域特有の語法など、ペルーのそれではケチュア、アイマラ語が挿入されたり、いずれの場合も辞書を引くのに時間がかかる。しかし、それでもラ・プラタ地域の作品から当初感じる戸惑いはない。ラ・プラタ地域の作品で用いられている“voseo”と呼ばれる二人称表現を中心とした独特な語法がもたらすこの戸惑いは、日本でもっばらカスティーリャ地方の標準モデルによりスペイン語の基礎教育を受けているから当然のことなのだが。ラ・プラタ地域以外の文学作品では、ふつう“voseo”はまず用いられないので、スペイン本国のものと比べてさして違和感はないように感じられるのである。

さて、私にとって、この広大なラテン・アメリカのスペイン語圏文学作品を読む際の、基本的な手掛かりを提供してくれた本は、Charles E. Kanyの *American-Spanish Syntax* (The University of Chicago Press, 初版1945年—改訂版1951年)である。Kanyは多数のインフォーマントと多くの文学作品の引用、諸研究に基いて自説を展開してるが、何よりも実際に本を読むのに役立つように書かれた本であるから、文字どおり現在でも生きている役に立つ本なのである。スペイン本国でも改訂版のスペイン語訳(1969年, Martín Blanco Álvares)¹⁾が出版されたから、多くのスペイン語圏の人々も読んでいることと思われる。

以下のアルゼンチンのスペイン語についての覚書は、Kanyの説く二三の事項に関して、私の所感を述べることが中心となるが、Kanyのものよりは新しい文学作品の引用と、最近の私自身の滞在とに基いている。私は1975年(三ヶ月)、1983~1984年(一年)、そして1987年(一ヶ月)にブエノス・アイレスを中心としたアルゼンチンに滞在した。私のインフォーマントとしては、おもにブエノス・アイレスの、大学教員、学生、職員、作家、新聞記者、弁護士、書店員、美術館員、アパートの門番、お手伝いさん、商

店員などの人々²⁾であるが、その他多くのさまざまな人々との接触や文通、ブエノス・アイレス以外のアルゼンチンの諸地方、チリー、ボリビア、ペルー、メキシコなどでの体験も参考にしている。

I

アルゼンチンのスペイン語を取り上げた理由としては、私自身の関心は言うまでもないが、何よりも、現代スペイン語に対して豊かで新鮮な影響を与え続けている、ラテン・アメリカのスペイン語を代表するものと考えからである。Kany は、*American-Spanish Syntax* の序文中で、各事項の文例をラテン・アメリカ二十数カ国のうち、アルゼンチンから始めている理由として、アルゼンチンの口語が他のどの地域よりも標準スペイン語と異なる面が多いので、より広範な研究に価すること、ブエノス・アイレスがラテン・アメリカでもっとも重要な出版中心地であるので、ブエノス・アイレスで自作を出版しようと希望する他国の作家が、アルゼンチンのスペイン語にできるかぎり自分の言語表現を適応させるであろうという Amado Alonso の意見を引用し、スペイン語総体に対するアルゼンチンの影響はラテン・アメリカの他の諸国よりも大きいであろうと述べている³⁾。他のどの地域よりも標準スペイン語と異なる面が多いことは、私の体験からも実感できるところで、言語表現としてもっとも関心をそそられる。

ブエノス・アイレスは現在でもラテン・アメリカにおける出版中心地であり、メキシコ・シティーやリマよりもはるかに高い出版活動が見られてきた。しかし、近年の対外債務の過重負担を主因とする悪政によるインフレーションのため、この二三年にわかに出版活動に翳りが見られるようになってきている。さらに七十年代末期の軍事独裁政権による弾圧も加わって、かなりの規模の知識人の亡命や頭脳流出現象が見られ、現在の教育政策も混乱を脱し切っていない。カラカスにおける出版活動の活発化も見られる現時点では、かつて中南米一の文化大国と見なされ、高い教育水準を保っていたアルゼンチンの将来を、この混乱した過渡期のなかから予想することは困難であるが、Kany の予言は未来が回答を与えるものであろう。

ところで、アルゼンチンのスペイン語と言えば、まず第一に“voseo”を取り上げるべきであろう。一般に、標準スペイン語を純正なものとする論

者はもとより、スペイン本国を中心とするかなりのスペイン語圏の人々が、いまでもアルゼンチンのスペイン語は汚いと考えている。その“汚いスペイン語”をいわば代表するものが、この“voseo”である。1940年代あたりまでは、アルゼンチンの作家でさえ、「汚い悪、醜悪な物、恐るべき voseo」と、自分の母国語を攻撃した例があり⁴⁾、スペイン本国のアカデミヤ文法を何よりも規範とする勢力の根強かったことがうかがわれる。

このような純正主義者に対して、アルゼンチンでは、独立後の十九世紀半ば以前から、自国の語法を擁護しようとする人々も存在していた。十九世紀を通じ、ラテン・アメリカ諸国に大きな影響を与えた、ヨーロッパから移入したロマン主義を標榜した人々であり、アルゼンチンにおいては、Esteban Echeverría や Juan Bautista Alberdi などが代表的な人々であった。Echeverríaの十九世紀ロマン主義を代表する作品の一つと見なされている短編 *El maladero* (1838年) や、民衆の語法を作家の創意が練り上げた作品である古典的な José Hernández の *Martín Fierro* (1872~1879年) などには、ヨーロッパ・ロマン主義のなかの、自由の追求とナショナルなものの確立を願う精神が流れていたのであるが、Kany も述べているように⁵⁾、二十世紀に入り、とくに第一次大戦後、ラテン・アメリカの作家たちは自国のナショナルなものの価値追求のため、盲目的な標準語モデル信奉を捨て、主としてリアリズムの手法でラテン・アメリカ各地独特の語法を作品中に採り入れ始めたのであった。

現在では、偏狭な純正主義者はもはやアナクロニスタとしか見なされないようになったが、それには、作家たちが作品を母国語で、自国の口語表現によって発表してきたことが、大きな影響を及ぼしてきたことと思われる。

アルゼンチンにおいては、おそらくはラテン・アメリカの文化的リーダー意識も働いて、40年代の例のような純正主義者の声が大きかったようである。この点に関して、現代アルゼンチンを代表する文学者の一人、Ernesto Sabato (1911~) の場合を挙げてみたい。

Sabato は、すでに小説 *El túnel* (1948年) と *Sobre héroes y tumbas* (1960年) 中で“voseo”を用いていたし、エッセイ集 *Heterodoxia* (1953年) や *El escritor y sus fantasmas* (1963年) 中においても、自国の口語表現を擁護していたのであったが、これに対する読者の疑問や反論に応じ

る形で、1963年にブエノス・アイレスの《Leoplán》誌上で「“voseo”について」と題した自説を展開している。

八部に分けて書かれている Sabato のこの文章は、そのうち何回かは同誌に送られてきた読者の意見に対する反論や説得という形を取っており、また同誌がこの問題についての読者アンケートを行ない、同じころテレビ討論も行なわれている。60年代前半と言え、ラテン・アメリカ文学、とくに小説が世界的な注目を浴びる《ブーム》の前兆が見られだしたころであり、アルゼンチンにおいても国語問題が大きな関心の的であったようである。

Sabato は、アルゼンチン独立後の十九世紀を通じて前記 Echeverría, Alberdi や思想家・政治家の Sarmiento らが行なったように、カスティーリャ語におけるアルゼンチンの形式の権利をまもる戦いを、作家として繰り返し、また豊かなものにする必要性を表明している⁶⁾。F. Saussure や Amado Alonso などの言語学者の説も含め、歴史的、哲学的、美学的観点から、*El escritor y sus fantasmas* 中でアルゼンチンの口語表現を十分擁護したのに、依然として反論が現われるのに対しての必要性であり、Sabato としてはもはや新しい論証は不必要だとしている。この読者からの反論で興味深く思われたことは、小学校・中学校教員（女性たち）から寄せられたもので、その内一人はまったくの純正論者であり、Sabato に言わせれば、カスティーリャ語標準モデルの偏狭な擁護者の反応は、「われわれの運命とわれわれの能力に関する不確かさの感情によってもたらされた、長く複雑な必理過程のため」⁷⁾である。もう一人の反応は、Sabato の説とアルゼンチン・アカデミヤの指導との間で動揺している気持ちを、率直な疑問の形で表明しているものであり、Sabato が“voseo”を擁護し、論争が行われているのに影響されて、当時のアルゼンチン・アカデミヤが小学校における教室での“voseo”排除を指導しようとしたことが分かる⁸⁾。

Sabato は、化石化したモデルに盲目的に執着する愚かしさを否定しているのであり、作家は「彼の状況の深い真実をけして犠牲にするべきでなく、彼の使うべき言語は、彼の仲間の人々が生まれ、苦しみ、絶望し、あるいは死ぬ瞬間に叫んだその言語、友情あるいは愛の最後のことばを発したその言語、日々の笑いと涙、不運と幸福、希望と絶望とに結ばれてきたものである。それはわれわれの幼年時代に飲みこんだあの言語であり、われわ

れの輪回しの輪やコマ、われわれの愛した犬や友達と混ざり合っているもの、われわれの夢やわれわれの悪夢にまで現れるあの言語である」⁹⁾、と述べ、“voseo”がアルゼンチンの人々の生きた言語の中核的な部分を成していると言っている¹⁰⁾。

ナショナルなものの肯定とアイデンティティーの追求に関わっている点では、Sabatoも十九世紀の先人たちと同じ道をたどっているわけであり、今日ではもはや自明の理のように、“voseo”を中心とした口語表現がアルゼンチンの文学作品においても定着しきっている。*El escritor y sus fantasmas* や、この論争における Sabato の説の詳細を示すことは、紙数が許さないので割愛するが、“voseo”が現代アルゼンチン口語表現のシンボルであることに関連して紹介した。

さて、初めて“voseo”に文学作品中で接した時の戸惑いに似た体験が、実際に“voseo”を使って会話を交わした時の感覚であった。ここでも、たんなる知識と実地体験の差というものをまず痛感した。チリーの人々のイントネーションとも異なる早口のイントネーションと、“che”のちりばめられた“voseo”の世界は、標準モデルで基礎教育を受けていることもあったか、当初は新鮮な響きにみちているように感じられた。しかし、アルゼンチンではウルグワイとともに、社会のあらゆる階層で“voseo”が用いられるので、その世界、つまりアルゼンチンの口語表現に自然に適應できるように思われた。

Kany によれば、この“voseo”は、ラテン・アメリカ全地域のおよそ $\frac{2}{3}$ で用いられているが、社会のあらゆる階層でまったく日常的に用いられているのが、他のいかなる国々よりもアルゼンチンとウルグワイにおいてである¹¹⁾。アルゼンチン・ウルグワイ以外の $\frac{2}{3}$ の地域とは、北はメキシコのチャパス州・タバスコ州の一部を含むラテン・アメリカの広範な地域であるとのことであるが¹²⁾、これはもちろんそれぞれの地域の一部や、ある限定された階層であろう。同じく Kany は、メキシコの大部分、ペルー、キューバその他の諸国やその一部では、“voseo”と対比される“tuteo”が一般的であると述べている¹³⁾。

広大なラテン・アメリカの $\frac{2}{3}$ の地域で、アルゼンチン・ウルグワイのように社会の全階層によってではなくとも、“voseo”が用いられているという Kany のこの説は、他の諸研究もふまえているわけであるが、アルゼンチ

ン以外での“voseo”を体験をもたない私には、何となく実感として理解できにくい感じがしていた。1958年に初めてラテン・アメリカを訪れてから、Kanyの言う $\frac{2}{3}$ の“voseo”が用いられる地域の多くの部分、それもかならずしも大都市に限らぬ地域を訪れたことがあったにもかかわらず、私には“voseo”体験がなかったからである。“voseo”を用いる階層・地域との接触や、より長期の滞在による調査が欠けていたのだろうか、と時に思ったりしていた。ところが、数年前にアメリカで劇場公開された映画“El Norte”をビデオ・テープで昨年観て、自分のそのような感じを修正しなくてはいけないと思うようになった。カリフォルニア州を中心にかなりの観客数を記録したというそのアメリカ映画は、メキシコの山村を舞台としており、厳しい現実を脱出して労働需要が存在するアメリカ（北）への移住を切望するメキシコ人たちと、かれらがアメリカで直面する現実とを描いたものである。そして、ロケーション制作によるメキシコの山村に、その住人たちに扮したメキシコ人俳優たちの登場する場面では、現在のままに、土語と“voseo”とが混在する口語が用いられていたのである。土語でないスペイン語が“voseo”であり、アルゼンチン・ウルグワイとは明らかに異なるイントネーションを帯びた“voseo”なのであった。

ここで、アルゼンチンの“voseo”に戻ることにしたい。前記のように、アルゼンチン・ウルグワイでは、社会の全階層で“voseo”が用いられている。もちろん、初対面の人、しかるべき機会・相手に対しては、ustedを用いるし、独特のイントネーションと早口のテンポに慣れていない外国人には、分かりやすく、必要ならば繰り返して話すから、その点は万国共通で、アルゼンチンのスペイン語がとくに分かりにくいということはない。イタリア系移民の影響による有名な“lunfardo”にしても、いまではとくにイタリア系移民の人々が仲間同志か、家庭内で用いるのがふつうのように感じられる¹⁴⁾。職業・身分・階層その他のグループ内固有の閉鎖的な語彙・語法は、グループ以外の人物には一般に用いられないものである。ちなみに、初対面の人や必要あってustedを使う時を除き、役所・空港・オフィスなどで、職業上の応対時に、ラテン・アメリカの全域で、ustedなしの三人称単数形が用いられるが、これがイントネーションや態度で、横柄で慥慥無礼なことばとして感じられることがしばしばである。

アルゼンチンで tú がもはや使われなくなっていく点に関しては、や

はりいまでは使われないものと思われる。しかし、これもスペイン人移民（一世）の家庭内や仲間同志で使われないものかどうかについては、確信がもてない。ブエノス・アイレスでもその他の地方都市でも、私は一般の人が使うのを耳にしたことはなく、初めての滞在時について“tuteo”を使ってしまうと、相手の友人に「自分の祖父の話しぶり」みたいだと笑われたことがあった。また、あらゆる層で“voseo”が用いられているのに、テレビ・ラジオなどのコマーシャルなどで、時に tú と呼びかけているものが、いまでもあることはある。外国人観光客のことばや、“voseo”を用いないスペイン語圏の映画・テレビ・本・雑誌などで“tuteo”に日常的と言っているほど接しているのであるから、アルゼンチンの人々には、自分たち固有のことばとして、“voeso”がかたく定着しているということが言えるのであろうか。

ところで、十二世紀(1140年)のスペイン文学最古の作品の一つ、“Poema del Cid”中に tú とともに現われた vos のスペイン本国における変遷と、これを受ける動詞活用形の変遷については、Kanyも述べているとおりであり¹⁵⁾、ほぼ周知のことと思われるので、ここではあくまでも最近のアルゼンチンの事例に限定したいと思う。ウルグワイではアルゼンチンとまったく等しい口語表現が用いられていると見てよいであろう。

周知のように、“voseo”とは、「tú に代わって親しい二人称単数に vos を用い、動詞は二人称単数と古形の二人称複数との間でゆれ動いている形、代名詞に te と vos (ti の代わり)、所有形容詞に tu と tuyo とを伴う」¹⁶⁾ことを意味する。ここで二三の例を挙げよう。

— Vos te das cuenta — le dijo Traveler a Talita —. Pretende que te arrastres hasta el medio del puente y ates la sogá. (J. Cortázar: *Rayuela*, p.286); — No te preocupés tanto — comentó ella... — Me hace bien todo esto: estar con vos, ver un barrio así, de gente que trabaja y hace cosas sencillas, sanas y precisas... (E. Sabato; *Abaddoñ el exterminador*, p. 228)

これもよく知られているように、“voeso”は、しばしば間投詞 che とともに用いられる¹⁷⁾。例えば、このように。

Che, oye; Dame, che; No puedo, che.¹⁸⁾

Cheはこのように、気軽に、¡ hombre! や ¡ pues! などのように使われている。この che は、アルゼンチンの人々がとくによく使うので、アルゼンチン人がある時は軽蔑的に、ある時は好意的に、“che の人”と呼ばれる原因となっている。Ernesto Guevara が、Che Guevara と呼ばれているように。

なお、che とともにアルゼンチンでよく使われているのが、hola と chau である。通常のあいさつ代わりに hola と、電話を掛けたり受けたりする際の hola（尻上がりのイントネーション）がよく用いられている。chau は、いかにもイタリヤ系移民の多い国らしい単語であり、adiós や hasta luego は、“voseo” とともに用いられないと思われるほどである。

II

アルゼンチンにおける“voseo”について、標準モデル語との相違を以下に見て行くのであるが、その相違は二人称のみであり、アルゼンチンにおける二人称複数形は、ustedes＋三人称複数動詞であるので、二人称単数を主として取り上げて行きたい。なお、アルゼンチンのみならず、ラテン・アメリカのほぼ全域で、特別な場合を除き、vosotros は用いられず、ustedes を用いることはよく知られている。その ustedes も、強調以外はあまり用いられない感じがする。

直接法現在形は、Kany の記している通り¹⁹⁾である。この際、ser は sos, tener は tenés, ir は vas, etc.となるのであるが、haber は has となる²⁰⁾。Kany の標記に従えば、次のようになる。

アルゼンチン	標準モデル
vos tomás	tú tomas
vos comés	tú comes
vos vivís	tú vives

文例

— Me oís? O te has dormido? — Sí, Palo, oigo todo lo que contás. (E. Sabato: *Abaddón...*, p.257. 散文で文頭の疑問符を省略した例でもある。) ; — ¿ Vos realmente sos un tipo culto o solamente la embocás? (J.Cortázar: *Rayuela*, p.285); — Lo que pasa es que no sos más que un cobarde. (J. L. Borges: *Historia de Rosendo Juárez*, p. 1038); — Si andás con ganas de meterte con alguien, ¿ por qué no te metés conmigo más bien? (J. L. Borges: *El indigno*, p.1030)

接続法現在形は、Kany によれば²¹⁾、次のようになる。

vos tomés	tú tomes
vos comás	tú comas
vos vivás	tú vivas

文例

“Pero te digo que esperés. ”(E. Sabato: *Sobre héroes y tumbas*, p.15); — Por eso prefiero que vos misma digás cuando podremos vernos. (Sabato: “— ”—”, p.198); — No te pongás tan excitado — me recriminó — . Sí, la idea fue mía, pero fuiste vos quien le sacó los ojos con la punta de una tijera. (E. Sabato: *Abaddón...*, p.300); — No seas idiota — dijo Oliveira. (J. Cortázar: *Rayuela*, p.186); — No te metás con mi patria — dijo Oliveira — . Parecés el viejo del piso de arriba. (J. Cortázar: “— ”—”, p.187); No te rompas la cabeza, no pienses en eso. Más tarde discutimos. (Manuel Puig: *El beso de la mujer araña*, p.259); — Quiero que lo comprendas, muchacho. Ahora sos de la familia. (H. Conti: *Alrededor de la jaula*, p.113. この作品は、1966年にメキシコのベラクルス大学短編文学賞を与えられたものである。“voseo” がラテン・アメリカで広く認められている一つの証左ではあるまいか。) ; — Estoy bien, no te preocupes. “H. Conti: “— ”—”, p.73); — No te amargués, viejo. (H. Conti: *En vida* p.44. 同じく、この作品も1971年度スペインのバルル小説賞を受賞してい

る。)

ここに見られるように、接続法現在形に関しては、標準スペイン語と同じ二人称単数形も用いられているように思われる。私のインフォーマントたちは、文通時にはまず標準形を用いている。この点についてあるインフォーマントに質問した際、*tomés, comás, vivás* の形のほうが、いかにもアルゼンチン的な感じがするとの答えを得たことがあるし、どちらも使うとの答えを得たこともある。文学作品では標準モデルの二人称単数形が優勢になりつつあるように思うのだが、*tomés, comás, vivás* の形は、語尾にアセントを置く点で、十九世紀ガウチョの伝統的な朗読のスタイルを継承しているようにも思われる。

直接法不定過去形は、Kany によれば、次のようになる²²⁾。

vos tomaste	または tomastes	tú tomaste
vos comiste	" comistes	tú comiste
vos viviste	" vivistes	tú viviste

文例

— Sí, dijiste algo y después te bebiste la limonada. No, esperá, la limonada te la bebiste antes. (J. Cortázar: *Rayuela*, p.369); — Milo, ¿me oíste?" (H. Conti: *Alrededor...*, p.24); — ¿por qué decís eso? Fuiste alguna vez a Estocolmo? (H. Conti: "— " —, p.38); — Así es que vos te lo despachaste a Garmendia? (J. L. Borges: *Historia de Rosendo...*, p.1035); — Me hablaste de un tal Molinar — dijo Martín —. Creo que dijiste que tenía una gran empresa. (E. Sabato: *Sobre héroes...*, p.121); — Lo dijiste aquella noche, en tu pieza, cuando me contaste la historia de tu familia. (E. Sabto: "— " —, p.270); — Vos viste la película. (M. Puig: *El beso...*, p.13); — Yo anoche no te entendí bien, me dijiste que tu compañera no era como me habías dicho. (M. Puig: "— " —, p.140); — Pudiste comprender cada uno de mis errores, nunca tuviste miedo, nunca pensaste

que estaba loco. (J. C. Onetti: *Juntacadáveres*, p.164. ウルグワイの小説家)

上の文例を見ると, *tomastes*, *comistes*, *vivistes* の形が, まったく使われていない。ブエノス・アイレスではもう使われていないように私は思っている。しかし, 年配の人, 地方での例など詳査する必要があるだろう。私は会話で耳にした記憶があるのだが, 私自身現在のアルゼンチンでの会話時には, まったくこの形を使わないし, 相手も使わないと確信している。

なお, この時制に関連して, 直接法現在完了を会話ではほとんど使わないことも記しておこう。有名な *recién* (標準語の場合と異なり, 単独で *recientemente*, *acabar de*~のように用いられる) と組み合わせて不定過去を使うことが多いからであろうか。会話のレベルではまず用いないようだ。

命令形は, Kany によると, 次のようになる²³⁾。

<i>tomá</i>	<i>toma</i>
<i>comé</i>	<i>come</i>
<i>viví</i>	<i>vive</i>

文例

- Tirale nomás el paquete, y volvé. (J. Cortázar: *Rayuela*, p.291);
- Callate, ya sé que no te gusta nada todo esto que te digo, pero dejame terminar... (E. Sabato: *Sobre héroes...*, p.15); — Quedate tranquilo, muchacho, no vas a tener que robar... (E. Gudiño Kieffer: *Guía de pecadores*, p.26); — A ver, explicá por qué es receptiva tu mamá,... (J. Cortázar: *Rayuela*, p.213); — Dejame — dijo ella...
- Prefiero que no entrés. (E. Sabato: *Abaddón...*, p.112)

命令形については, 文例でも明らかなように, Kany の記している通りである。いかにも “voseo” らしい感じがする活用である。なお, 不規則形は標準語と同形を用いることもあるように思われる (*ten*, *vete* など)。

Kany は、他のすべての時制においては、動詞は標準語と同形の二人称単数形を用いると述べているが²⁴⁾、この点については、その通りである。言い換えれば、現代アルゼンチンにおいては、上記以外の他のすべての時制においては、標準語と同じ動詞活用形を用いているのである。

例えば、直接法未来は、vos tomarás, comerás, vivirás となる（不規則形も標準語と同じで、tendrás, harás, などとなる）。ただし、会話では、話し手が未来形を使うことを最近では聞かない、voy a~の形を使うのが一般的だと、あるブエノス・アイレスのインフォーマントが語っている。

未来形その他の時制については、標準語と変わらないので、それぞれ少し文例を挙げておこう。

直接法未来形の文例

— A la tarde lo visitará en su casa. (Adolfo Bioy Casares : *Diario de la guerra del cerdo*, p.25)

直接法不完了過去形

— Después, cuando volvíamos a casa, subiste a una calesita que estaba en un baldío de la calle Garay. (E. Sabato: *Sobre héroes...*, p. 43); — ? Vos eras sargento, no? (Osvaldo Soriano: *Cuarteles de invierno*, p.93)

接続法過去形

Como si estuvieras siempre en posición de firme... (E. Sabato: *Sobre héroes...* , p.16); ...Los militares están subordinados al gobierno del pueblo y sólo serían llamados a intervenir en caso de que se tratara de una sublevación importante. (O. Soriano: *No habrá más penas ni olvido*, p.73)

可能性単純形

— ¿Cómo te aguantarías a vos mismo después de cincuenta años, (E. Gudiño Kieffer: *Guña de...*, p.100)

直接法現在完了形

— ¿Qué te pasa, amigo? ¿Te has olvidado de nosotros?... (H. Conti: *Alrededor de...*, p.41)

直接法大過去形

— Creí que te habías ido. (H. Conti: *En vida*, p.25)

接続法大過去形

— Nunca me hubiera imaginado esto, don Ignacio — dijo. (O. Soriano: *No habrá...*, p.67)

他の時制についても同様であるので省略するが、すでに述べたように、“voseo”においては、主語 vos に対応する目的語代名詞は te であり、前置詞格代名詞は vos, 所有格は tu, tuyo である。再帰動詞は、すでに前記の文例にも見られる通りに、Vos te acostás という形になるわけである。これらの点に関して、最後に二つだけ文例を示そう。

— Mirá, te voy a decir una cosa: sabemos también que vos no sos guerrillero, que sos incapaz de matar una mosca. Acá estamos mucho más enterados de vos de lo que te podés imaginar. No te torturamos por eso, comprendé: te torturamos porque sabés cosas y tenés que largarlas. Tenemos depositadas muchas esperanzas en un tipo como vos, por eso mismo. Porque te gusta la poesía, porque sos delicado. Sabés? No lo tomés a mal. No vayás a creer que yo picaneeo por gusto. No. Yo también tengo familia. O qué te creés que somos nosotros: bestias sin madre? (E. Sabato: *Abaddón...*, p. 481); — ¿A vos te gustaría eso? (M. Puig: *El beso...*, p.50)

III

すでに見てきたように、現代のブエノス・アイレスを中心としたアルゼンチンにおける“voseo”は、接続法現在形と直接法不定過去形において、

Kany の述べているところと比べ、少し変化を見せ始めているように思われる。私の挙げた文例は、よく知られた作家からのものに限定したが、これらの作家たちは、二つの時制の新しい活用形を選ぶことによって、スペイン語全体のカオスではなく、統一の道を目指しているのではあるまいかとも思われる。二つの変化とも、標準スペイン語の形であるからである。もっとも、これには、スペインで出版する機会の多い亡命作家たちや、ヨーロッパとアルゼンチン双方で生活したりする作家が多いという事情が影響を与えうるとも考えられ、早急な結論など出せそうにない。

古いスペイン本国からの代名詞 vos が今日でも生きている事実は、旧世界と新世界との接点であったキューバやドミニカ共和国、副王の宮廷が置かれていたメキシコ、ペルーなどでは、“voseo” の力が弱かったことを考えれば、ラ・プラタ地域がスペイン本国からはるかに遠隔の地であったこともあり、アメリカ大陸の旧世界との関わりの歴史のなかで、壮大な空想力をかきたせる面を持つように感じる。

Kany と同じように博学で偉大なアメリカニスタであり、Kany のインフォーマントでもあった Ángel Rosenblat は、あるヒスパニック地域の住民が他の地域に移動した場合、その地の民衆の、自分のものと異なる発声上の諸特徴、ことにイントネーションとテンポとに困惑し、当初は「何も分からない」と感じたりするが、数日間の適応ですべてを理解するものだと述べている²⁵⁾。先に書いたキューバでの私の体験がまさに当てはまるように思う。キューバではほんの一、二日間の滞在であったことも思い出す。アルゼンチンの場合は、当初の「新鮮な音」という印象が、いまは耳になじんだイントネーションになっている。しかし、アルゼンチンでは、女性で llave や llamar の ll を [ʃ] 音で発音する人もいて、驚かされることがある。この国がスペイン、イタリア、スランスのみならず、ヨーロッパの他の多くの国々からの移民（とその子孫）たちからも成り立っていることに関係しているからであろうか（例えば、アルメニア系の人々は家庭内でアルメニア語を話していると言っていたし、イスラエル系の人々は、広大なクラブで子供たちに母国語教育を行なっている、等々）。

ある国のスペイン語が汚いと言う場合、そこには多くの偏見が含まれていると私は思う。アルゼンチンもチリーも、そのイントネーションとテンポは、初めての耳に美しく響いたのだった。私にとって、ラテン・アメリ

カのみならず、スペイン語圏全域で、「それぞれの小鳥がそれぞれの歌声を持っている」ように思われる。もちろん、イントネーションやテンポを本格的に論ずるには、各地方・諸階層・性別・職業・年令別等による、系統的なテープ録音を基にしなければならないだろう。

[注]

- 1) Charles E. Kany: *Sintaxis hispanoamericana* (Versión española de Martín Blanco Álvarez), Gredos, 1969.なお、Kanyからの引用は、1951年改訂版を参照して、このスペイン語版より行なっている。
- 2) 当然のことながら、この種の調査は、多数のインフォーマントと確固たる方法論とに基いて得た、多くのデータから結論を抽出すべきである。例えば、拓殖大学の浦和幹男教授がコロンビアで行なわれた *Muestra de hipococrísticos en el español bogotano* (THESAURVS, Boletín del Instituto Caro y Cuervo, tomo XL, 1985.) などのように。私のものはささやかな覚書にすぎない。
- 3) Kany: *Sintaxis...*, p.11.
- 4) Ibid., p.86.
- 5) Ibid., p.7 ~ 8.
- 6) Ernesto Sabato: *Sobre el voseo*, Obras Ensayos, Ed. Losada, Bs. As., 1970, p.949.
- 7) Ibid., p.948.
- 8) Ibid., p.958.
- 9) Ibid., p.950.
- 10) Ibid., p.950.
- 11) Kany: *Sintaxis...*, p.80.
- 12) Ibid., p.80.
- 13) Ibid., p.80~81.
- 14) もっとも一般的に用いられている語彙のうち、morfar (=comer)と coso (=cosa)を入れてよいのではないかと思われる。
- 15) Kany: *Sintaxis...*, p.81~87.
- 16) Ibid., p.78.
- 17) Ibid., p.79下段注参照 (cheの由来について)。
- 18) M. A. Morinigo: *Diccionario de Americanismos*, Muchinik Editores, Bs. As., 1966, p.181.
- 19) Kany, *Sintaxis*, p.88.
- 20) Ibid., p.92.
- 21) Ibid., p.88.
- 22) Ibid., p.88.

- 23) Ibid., p.89.
- 24) Ibid., p.89.
- 25) Ángel Rosenblat: *El castellano de España y el castellano de América*, Taurus, Madrid, 1970, p.141.

文例は、以下より順に引用している。

Julio Cortázar: *Rayuela*, Ed. Sudamericana, Bs. As., 1970 (初版1963).

Ernesto Sabato: *Abaddón el exterminador*, Ed. Subamericana, Bs. As., 1975 (初版1974) .

Jorge Luis Borges: *Historia de Rosendo Juárez*, (短編集"El informe de Brodie — 初版1970年 — 収録) , Obras Completas, Emecé Ed., Bs. As., 1974. — " — : *El indigno* (同上), Obras completas (同上)

Ernesto Sabato: *Sobre héroes y tumbas*, Ed. Seix Barral (Ed. definitiva), Barcelona, 1978 (初版1961) .

Manuel Puig: *El beso de la mujer araña*, Ed. Seix Barral, Barcelona, 1979 (初版1976) .

Haroldo Conti: *Alrededor de la jaula*, Ed. Sudamericana, Bs. As., 1977.

— " — : *En vida*, Barral Editores, Barcelona, 1971.

Juan Carlos Onetti: *Juntacadáveres*, Ed. Revista de Occidente, Madrid, 1969 (初版1964年) .

Eduardo Gudiño Kieffer: *Guía de Pecadores*, Ed. Losada, Bs. As., 1972.

Adolfo Bioy Casares: *Diario de la guerra del cerdo*, Emecé Ed., Bs. As., 1969.

Osvaldo Soriano: *Cuarteles de invierno*, Bruguera, Bs. As., 1983.

— " — : *No habrá más penas ni olvido*, Bruguera, Bs. As., 1983.